

第30回津市総合教育会議議事録

日時：平成30年12月7日（金）

午後4時開会

場所：津市教育委員会庁舎4階 教育委員会室

出席者

津市長

前 葉 泰 幸

津市教育委員会

教育長 倉 田 幸 則

委 員 上 島 均

委 員 滝 澤 多佳子

委 員 富 田 昌 平

委 員 中 村 光 一

教育次長 前葉市長から第30回津市総合教育会議の開会の御挨拶をお願いします。

市長 では、ただ今より第30回津市総合教育会議を開催します。よろしくお願いします。

教育次長 ありがとうございます。それでは、本日の協議・調整事項といたしましては、学校現場に関わる方々との懇談結果に係る次年度以降の取組案についての1件でございます。それでは、早速入りたいと思いますので、まずは事務局から御説明させていただきます。

教育事務調整担当参事(兼)教育総務課長 教育総務課長の下里でございます。座って失礼いたします。それでは、教育委員会事務局におけます次年度以降の取組案について、御説明を申し上げます。別紙の「資料1」を御覧いただきたいと思います。横のA4版でございます。以前に行いました懇談会では、学校現場に関わる方々とテーマを決めてそれぞれお話をさせていただきましたので、取組案につきまして、テーマごとに整理して記載をさせていただいております。まず、働き方改革につきましては、学校行事等の見直し、教職員の意識改革、部活動の取組、教職員の校務分掌・授業内容等における取組案の概要をお示しさせていただいております。そのうちの一つになりますが、平成31年度の新たな取組として、部活動指導員の配置人員の拡大をいたしまして、本格的に実施していきたいと考えております。次に、教員支援員につきましては、教員支援員の活用方法、成果、課題、要望についてお示しておりますが、別添の参考資料1、2を配布しております。そちらのほうに、今後の教員支援員の拡大配置に対する考え方や、11月に教員支援員の配置校4校の学校の先生に実施いたしましたアンケート調査の結果を添付しております。資料の中で、教員支援員の効果の検証や平成31年度以降の教員支援員の配置に係る論点整理を行なっておりますので、御協議の参考としていただけたらと思っております。次に、防災防犯につきましては、通学路の安全対策、防犯対策の訓練の取組としまして、通学路の合同点検や各学校での訓練などを引き続き実施していく考え方を示させていただいております。学力の向上の取組につきましては、英語教育への取組やその他の学力向上に向けた教育に必要な取組をお示ししております。そのうち、デジタル教科書の導入につきましては資料3を配布しております。平成30年度から一部の学校において試行的に導入しておりますデジタル教科書の導入目的や利点、モデルとなった学校、今後の導入スケジュールなど、その概要をまとめたものを添付しておりますので、こちらも御協議の参考としていただけたらと思っております。次

に、津市立幼稚園の今後のあり方につきましては、現在、教育委員会内及び関連部署と協議を進めておりまして、現時点の協議内容の概要を記載させていただきました。今後も引き続き協議を行いまして、第2期の津市子ども・子育て計画へ反映させていきたいと考えております。以上で資料のほうの説明は終わらせていただきます。この後、引き続きまして、デジタル教科書を使った学習風景や英語授業の様子を録画したものを御用意しておりますので、御覧いただきまして、今後のデジタル教科書の活用や英語教育のあり方等につきまして御意見をいただけたらと思っております。それではお願いします。

教育研究支援課長 教育研究支援課長でございます。失礼いたします。それでは、動画の内容につきまして簡単に説明をさせていただきます。2020年度より新学習指導要領が全面実施となることを受けまして、本市におきましては、本年度から小学校の3・4年生で外国語活動、5・6年生で英語科の授業を行っております。本日は最初に、小学校教員、これは、英語の免許を持っていない小学校教員3人がそれぞれの授業の中におきまして研修会で学んだことを授業の中に生かしている風景を御覧いただきます。また、ALTとの連携の授業も次に御紹介させていただきます。最後に、デジタル教科書を導入させていただいております中学校1年生の授業風景を見ていただきます。6分程度の動画となっておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。では、前のスクリーンのほうをよろしくお願いします。

～ 動画上映（約6分程度） ～

教育研究支援課長 以上でございます。事務局からの説明を終わらせていただきます。

市長 ありがとうございます。記憶に新しいところで、デジタル教科書、あるいは、フラッシュカードを使いながらの英語教育について、御自由に御感想などをおっしゃってください。

滝澤委員 このペーパーでは、小学校でデジタル教科書を使うのは、主に国語ですね。中学校になって、今、このモデル校では国語と英語が入っていると思うので、そのデジタル教科書という効果的な教材を使うのに、国語というのが私はすごく安心したといえますか、日本ですので、全てが基本的には日本語で、話とか、問題を解く力とか、読解力、相手に伝えるというのは、全て国語が基本になっているんですね。それを、モデル校では、小学校では重点的に国語をまずやってい

き、中学校になって英語ですね。導入スケジュールとしては、小学校の国語、中学校の国語と英語となって、だんだん、2020年には小学校に国語と英語が入る段取りですので、本市としては、基本的に小学校のうちは国語が重視されているところが、私は少しほっとしたような気がしまして、やはり基本に国語があるということで、英語ももちろん大事ですけども、まず国語でいろいろ考えたり、発想したり、感じる事が基本ですので、国語が全てベースになると思います。それをデジタル教科書で効果的に学んでいただいたうえで英語を入れていただくという順序をきちんと踏まえていращやるのではないかなと思ひまして、英語ばかりが先行しないというところはいいのではないかなと思ひた次第です。それから、デジタル教科書を今見ましたら、非常に効果的だと思います。例えば、子どもとか、特に孫の世代ですね。おもちゃがほとんど、国語と英語、例えば絵本でも何でもそうなんですけど、ただ文字だけを追うとか絵だけではなくて、何かタッチすれば音声が出て、少し触り方を変えろと英語であつたり、そういうおもちゃ自体がかなりデジタル化しているのではないかなと思ひんです。だから、子どもとしては割りと素直にこのデジタル教科書に入っていけるのではないかなと思ひます。むしろそちらのほうが、幼児時代から、「面白く、楽しく」というのであれば、デジタル教科書を積極的に導入していただいたほうが今の子どもたちには合っているのかなという気がいたします。国語、英語、それぞれ非常に効果的だと思いますので、予算の許す限りこういう効果的な教材を活用していただければと思ひております。

市長 国語については、どうですか。

教育研究支援課長 失礼します。国語につきましては、特に、範読であるとか、今まで教師がしていたんですけども、それをプロの方が読んでおられますので、抑揚であつたりとか間の取り方であつたりとか、そういったものが非常に規範になるということと、それから、今まで教員が漢字などにルビを振ったものを事前に授業の前につくっていたんですけども、それが、臨機応変に子どもの状況に応じて、ルビもデジタル教科書のスクリーンの中に出てくるということであつたり、漢字の書き順であつたり、そういったものが視覚的にも非常に分かりやすいということで、子どもたちからも教員からも好評になっております。

市長 そのほかの御意見として、中村さんどうですか。

中村委員 デジタル教科書の良し悪しは、当然導入したほうが絶対いいかなと思ひました。ただ、これまで津市はパソコン関係でもいろいろなソフトを入れて

教育を進めていただいていたと思うんですけども、その辺の住み分けというのが、これから必要になってくるのかなと思います。デジタル教科書を導入すれば、これまで使っていたソフトとか、これまでのツールが要らなくなり、合理的な見直しをしていく必要があるかなと思います。

市長 ソフトとの関係はどうか。

教育研究支援課長 以前までもインストールしたソフトを使っていたんですけども、やはり、新学習指導要領が改訂になりまして、目指している力であるとか教える内容も変わってきておりますので、それに合ったものがデジタル教科書というかたちでつくられてまいりますので、そのところをきちんと検証しながら使っていきたいと思っております。ありがとうございます。

市長 では、どうぞ富田先生。

富田委員 はい。映像を見させていただきながら、やはり、子どもたちの感想にもあったように、動きがあったりとかするのが、子どもたちのモチベーションを持続させ、興味関心を長続きさせるという意味では、すごく効果があると思います。その意味で、そのほかにもデジタルの利点というのは様々にあるかとは思いますが、今見た中でも、英語の発声で、実際にカラオケのように、今どこの所を発音しているのかを目で見てわかるというのは、非常に効果的だろうなと思いました。ただ、一方で、子どもたちの様子を見てみると、やはり、刺激に対するすごく直接的な反応の繰り返しという、パッと反応するというのが何となく、不安な感じはするというのがあります。やはり、デジタルの可能性というものをむやみに全て信じてしまうというわけではなくて、これまでやってきたアナログの良さ、実際の実物の人との交渉という良さは当然あるわけで、やはり、それはデジタルの中で育まれるような学習へのモチベーションとはまた異なるような、もう少しその場で迫力を持って子どもたちの感情というものに激しく訴えるようなものは、これはデジタルではなくて、アナログという実物・実体験というものでしか得られないものだと思いますので、その辺のアナログとデジタルのバランスの取り方をきちんと視野に入れつつ議論することが大切なことかなと思います。

市長 バランスについて、教育長どうですか。

教育長 確かにおっしゃるとおりで、子どもたちは、新しいデジタル画像という

ことで、当然関心を持つと思います。ただ、それで喜んでいるわけにはいかず、やはり、定着であるとかいろいろな学力の中身のことを考えると、さきほどおっしゃられたようなそれ以外の部分の教師の力量も必要かなとすごく感じているところがあります。デジタル教科書は導入したばかりですので、先日の議会でも出ておりましたが、これをどのように活用していくかという教師側の課題というのは、まだまだ大きいものがあるのかなと今も見ていて感じました。しっかりと使い方について教員のほうが分かっている、なおかつ、それはやはり、回数を重ねて使っていないと、教員の使う力量が上がっていかないのかなと感じました。

市長　そうですね。では、上島先生。

上島委員　使い方だと思うんですよ。例えば先生方が英語はちょっと苦手だなと思ってこれに頼ってしまったら、結局は駄目じゃないかなと思います。例えば漢字でも、書き方をこうして見るのはいいんです。その後、何回も空書きさせていくことによって確実な文字ができると思うんです。そういった活動をきちんと入れていった授業を組まなかったら、こればかり見て、「やりなさい、終わりです。」みたいなのではなくて、これを一つのきっかけにして、そこからもっと活動を入れていくことが必要じゃないかと。活動することによって担当の先生方が、誰が困っているのか、どこに困っているのかを見ながらやっていけるのではないかなと。見ていたら、みんな合わせてやっているだけで、本当に理解しているかどうかは難しいところがあるもので、そういったことが今後必要になってくるんじゃないかなと思います。先生方があまりにこれに頼ってしまって、これだけやっておいたらいいというものではないと思います。

市長　そうですね。デジタル教科書について、教育長は使いこなす教員の力量と言われましたが、これは、誰が先生であっても流しておけば、子どもたちは「おお」と言って、関心を持つわけで、今の小学生はそれほどでもないかもわかりませんが、要するに、スマホをうまく使いこなす世代にとっては極めて自然なんでしょうけど、それをどうやって教育の現場で使うかということでしょうね。デジタル教科書に頼ってしまったら駄目というのはおっしゃるとおりで、この映像から教員の熱さみたいなものが伝わってこなかったように、また、富田先生が言われた迫力を持って子どもたちの感情に訴えるというのがアナログの良さですが、それを忘れてしまはないかという感じは私もすごくしましたね。今日の6分間の映像で逆に私自身は率直に言ってデジタル教科書を心配になりましたね。その辺りは、どうですか。

富田委員 いいですか。

市長 どうぞ。

富田委員 一応、先月、先進地視察で岐阜のほうに行かせていただいて、その小学校は10年ですかね。10年は取り組まれていたのですか。

教育研究支援課長 10年以上です。

富田委員 10年以上ですか。

教育研究支援課長 はい。

富田委員 英語教育を熱心に取り組まれている小学校を見させていただきましたけども、やはり、先生方も研修を重ねていることもあって、非常にお上手だなと思ったんですけども、そこを見た次にこれを見たものですから、そことの比較で考えるとやはり、デジタル教科書を使っている、その場にいる先生の人間的な魅力や迫力というものは前面に出ていて、子どもたちのはじけるような笑顔は、それに引きずられるように現れているんですよね。デジタルに引きずられてはじけるような笑顔が出ているのではなくて、先生やあるいは子ども同士の実際のやり取りの中で子どもの感情が揺さぶられてはじけるような笑顔が出ているというのがありましたので、それによって学習へのモチベーションも当然高まってくるし、非常に深く刻まれていくわけですから、その点は今後のやはり教師の力量ということで、使い方というところを様々な形で研修を重ねていく必要があるのかなと感じました。

市長 そうですね。ALTがものすごく教室にフレッシュな空気を持ち込むというのは、多分、エキサイティングなムードというのは日本人の先生では出せないが故に、みんながウワウワツとなるムードができるわけですね。カメラが回っているから緊張しているのかもしれないのですが、ちょっと全体的にやや暗い感じがしますね。教員の温度が低い感じが僕はしたんですけど、どうですか。

教育長 今日は、デジタル教科書を御参考に皆さんにも知っていただきたいということでこのような構成になっていましたけども、行っている教員は力量のある教員だと普段から認識しています。ただ、もちろん、デジタル教科書に頼る

ということではなくて、今お話が出ていますように、それをどう使いこなすのかということが非常に重要になってくると考えています。デジタル教科書について、例えばALTのお話がありましたが、ALTも入った頃は、先生がALTに頼っているという現状でした。そうではなくて、やはりALTと普段からどう打ち合わせをして、二人でどう授業をつくっていくかが大事なことであって、デジタル教科書も同時に、それは、デジタル教科書と教員がともに、機械のことですので協同と言ったらおかしいですけど、それが非常に重要な視点になってくるというふうに自分は考えています。

市長 そうですね。デジタル教科書を使いこなすように、それこそ、どのように使うかの研修をして欲しいですね。計画案とかはあるのですか。

教育研究支援課長 はい。もう既に研修会はしているんですけども、今、デジタル教科書が入っている学校は5校ですので、まずその学校で、今言っていたただいたように、教師がこれをどう使いこなすかをしっかりして、来年、先生方に見に来ていただけるようなこの検証校による公開研修や業者を呼んでの効果的な研修も含めて計画をしております。

上島委員 よろしいですか。

市長 はい。上島委員。

上島委員 ある程度の方がやってみえるんだろと思うんです。ということは逆に言うと、学校としては、これに頼ってしまったら逆にそれだけで終わってしまうのではということをやっと心配しています。それで、ぜひともお願いしたいのは、英語はデジタル教科書があるので、それを使ったら何とかなるので大丈夫ですよというのではなくて、やはり教師が前面に立っての学習であることを踏まえたうえでデジタル教科書の使い方を研修する。つまり、これに頼ったらそれでいいということではなく、デジタル教科書をどう使うかという研修をお願いしたいなと思います。

市長 デジタル教科書に使われないようにですね。

滝澤委員 そうですね。この前も、視察に行かせていただいたときは、非常に活発な授業展開がなされているのですが、一方で、このスピードについていけるのかな、落ちこぼれている子がいるのではないかなと思いました。デジタル教科書

というのは、一人一人を見てつくられているものではなく、全体でこういうのが標準だろうというスピードで進行していくので、中には、理解ができなくてもただ見ているだけで授業が進んでいくので、きちんとついていけない子とついていけている子と、先生はやはりしっかり見ておいていただく必要があるのではと思います。先生自身がやっていれば、ちょっと理解が不十分かなと思うと、何回も同じことを繰り返したりスローにしたりすることができるのですが、デジタル教科書は一つの画一的な速さで進んでいくだけなので、その辺はやはり、しっかり子どもの様子を見ておいていただいてフォローしていただく部分が先生にはやはり要求されるのではないかなと思います。

市長 そうですね。

中村委員 デジタル教科書は教師のほうがそのデジタルに使われないようにする、これが大事なのかなと思います。岐阜のほうへ視察に行かせていただいて、やはり、先生の温度の違いというのは、今のこのビデオを見てすごく感じました。岐阜のほうは、本当にもう、先生がすごい。

市長 ノリノリでしたか。

中村委員 ノリノリでしたね。それにつられてやはり子どももノリノリ、しかも、その子どもたちが、確かに落ちこぼれている子はいるかなとは思いますが、私は、全体に皆すごくよく理解しているなと思いました。確か、あれは小学校2年生でしたかね。

教育研究支援課長 2年生と3年生です。

中村委員 2年生と3年生ですか。2年生のレベルでもう私の英語力をはるかに凌駕していると、そんな感じがしました。ですから、やはり教え方なんだろうなという気がしました。

市長 ここまでの議論を受けてどうですか。

教育長 先ほどお話がありました岐阜の長良西小学校に自分も一緒に行かせていただいて、まさにおっしゃるとおりで、自分の率直な感想は、先生自身が授業を楽しんでいるなと感じました。英語についても、普段から申し上げているとおりで、やはり教員自身が英語を教えるということが好きでなければ英語の楽し

さとかは伝わらないということで、その辺を教育委員会もいろいろな英語の研修もして、自主的な教員の参加も募っているわけです。こちらの研修に参加した教員も、最初は英語が苦手であっても、研修活動の中で好きになって、英語をやりたいなということになったということを聞いております。そうしたことを進めながら、一人でも多くの教員が英語を好きになって、授業ができるようになれば、さきほどの話のように温度も上がってくるのかなと感じます。

市長　そうですね。大体皆さんの御意見が揃ってきたようでありますから、そういう意味で、デジタル教科書はまだスタートしたばかりでありますから、是非ともうまく使いこなせる、そういう津市の小中学校になってほしいなと思います。では、もう少し話を進めまして、その他の項目に入りたいと思うんですが、どこからでも結構でございます。今、来年度に向けての予算の協議などを始めているところでございますし、また、教育委員会の中でもいろいろな事務局の案に対していろいろな御意見が出てるように聞いておりますので、この場で何かを決めていくということにはならないと思います。こういうことはきちんと頭に置いて来年度の政策を決めなければいけないよねというようなことを、それぞれ皆さんお気になさっているところがあると思いますので、その辺りを御自由に御発言を願いたいと思います。どの項目でも結構ですので、お気づきになっていくことで、この場で言うておかなければというようなことをおっしゃっていただき、そこから深めていきたいと思います。よろしくお願いします。上島委員どうぞ。

上島委員　教員支援員については、各学校からのアンケートを見たときに小学校と中学校でかなりの温度差があるんです。特に、我々がいつもやっている子どもとの対話とか、あるいはゆとりとかは、小学校ではかなりそのことで満足度があるんですけども、中学校の場合本当に少ないという、そのところについての分析はされていますか。

市長　そこは分析しましたか。どうぞ。

教育長　自分も直接、教員支援員に働いていただいている小学校と中学校の先生方とお話したことがあります。自分が感じたことですがけれども、やはり、小学校で非常に活用され、満足度が高いのは、教員自身が、教員支援員とどんなふうに働いていただくかということについて情報交換をしている雰囲気は小学校のほうがあったと感じました。それから、今から話すのは自分の想像なんですけども、中学校の教員は特に学校が荒れていなければ空き時間がありますので、その時

間で事務作業ができますが、小学校は基本的にはなかなか、空き時間が中学校に比べて少ないことを考えると、小学校の教員の方が通常ですと空き時間が少ない分、教員支援員に依頼しやすいという、そういうもともとの文化もあったのかなと自分の所感ですけども感じています。

市長 どうですかね。

上島委員 確かにそれはあると思うんですけども、例えば、中学校の先生はそれだけゆとりを持っているかといったら、そうじゃないと思うんです。何が原因なのかといったら、時間があるので自分でできるからではないかと思います。ただ、放課後の部活とかにかなり苦しんでいるのではないかと。ですから、同じように小学校と中学校、中学校は部活をこういう形で補助しますとか、小学校はこうしますというのをある程度分けたほうがいいんじゃないか、一緒に考えるよりは、小学校で困っていることは何か、中学校で困っていることは何かに対して補助をすることが大事じゃないかと思います。

市長 クラブ活動については、この教員支援員はほとんど関わっていないわけですね。ちょっと話がそれるかもしれませんが、クラブ活動への支援についてはどのような議論になっているんですか。

教育長 部活動につきましては、教員支援員とは別に、本年の10月から部活動指導員というのを2校に配置して、効果を検証しているところです。来年度についての意向調査をしたところ、10校ほどの学校から、是非お願いしたいと聞いております。部活動指導員については、教員に代わって顧問ができます。顧問ができる人材が必要であることは、学校も認識しており、人材の当てがあり、また一方で教員の中にもいろいろな家庭状況がありますので、休日の部活動についても、比較的休日の部活動を担いやすい教員もいれば、そうではない家庭事情の方もみえます。そこをうまくマッチングであるとか、より重要度の高い学校などへの人材配置ということから、今は10校ほど要望をお聞きしておりますので、県教委には、強く、十分予算をとっていただき配置していただくよう要望しているところで、部活動については、この部活動指導員をできたら拡大して配置していきたいと考えています。

市長 確か、部活動指導員は、国3分の1、県3分の1、市3分の1の負担割合でしたね。スクール・サポート・スタッフは、全国で3,000人で、三重県が5人でしたか。

教育長 5人です。

市長 5人というのはどうかという話をずっとしているんですけど、亀山市長の櫻井さんが部活動指導員も同じような話だとこの間、力説していましたね。部活動指導員も、全国で何人の中で、三重県は何人になるのですか。

教育研究支援課長 今年は全国4, 500人のうち、三重県は10人です。

市長 ほぼ同じレベルですね、10人ですよ。全国の100分の1が三重県で、の数という100分の1論というのがよくあって、そうすると45人のレベルに持ってこないと思います。10人しかいないのであれば、特に亀山市には2人派遣しようみたいな議論になっていると亀山市長も怒っていましたが、この公開の場であまり人のことを言ってはいけないので、その辺は県教委と予算の議論はきちんとしていますか、これは、国に対してきちんと予算を取りにしていますか。

教育研究支援課長 最初は、三重県では、来年の部活動指導員を10人で国に対して取りに行く話でした。しかし、津市の要望数だけでも10人となりますので、その県が取りに行く10人を津市に全員いただけるんですかと話をさせていただきました。それで今、県が各市町へ調査をかけて、20数名希望があったとのことですので、それをクリアするかたちで県は国へ要望をあげていくと聞いています。

上島委員 よろしいですか。

市長 はい。

上島委員 部活動指導員は別に退職した教員でもいいんですよ。

教育研究支援課長 はい。

上島委員 そうしたら、そういったことで専門に雇った人を上手に使うのもいいと思うんです。だから、逆に言ったら、退職して教壇に立つ教員もあれば、こういう部活の指導員になるのもいいと思います。そういった人を生かせるようにすれば、どこも行くところがなくて仕方がないので、十分やったけど仕方がなく

教壇に立つというようなこともなく、やはり生かせるものは生かしてやったほうがいいような気がするんですけどね。県もある程度はそういった見込みで、そちらを減らしてもこちらをもっと増やすという方法をとれないのかなと思うんですけどね。

市長　そうですね。県教委と市教委の今後の対応の温度差があるといけないので、県教委にきちんと体温を上げてもらうように強く話をしていってほしいですね。

教育長　はい。

市長　亀山市長は、知事との1対1対談でこの前きいたところ部活動指導員の話をしたということでしたね。ほかはどうですか。はいどうぞ、滝澤さん。

滝澤委員　先ほどの教員支援員の話に戻りますが、参考資料2の「何回この教員支援員の方に」というのは、先ほど上島先生が言われたように、小学校では頻度が多くて中学校では少ない、特に千里ヶ丘小学校は、月に5回から次に多いのが10回、20回以上が10パーセントです。中学校では20回以上なんてほとんどない状態で、要は、学校が教育支援員をいかに使いこなせているかどうかと、教育支援員の質といいますか、働き方に対して教員支援員の業務が合っているかどうかのマッチングとかですね、そのような、特によくやっていただけており、教員支援員に仕事を振っていきける学校は非常に満足度が高いわけですよ。うまく仕事を回せていないところは満足度が低いわけでございまして、これは、今後、教員支援員を拡大するうえで、例えば、一年間行事をしっかりと見てみないと、どのような仕事でどのようなところで助けられるかがしっかり見えてきません。それから、今年のモデル校の千里ヶ丘小学校ですが、来年度は、千里ヶ丘小学校に来ていた方は別の学校へ行くのかとか教員支援員が配置されなかったときはどんな感じになるのかとか、他校でもやってみたいということになるかもしれませんが、2年ぐらい継続してやっていただいてもいいのかなという気もしています。1年目はこれだけだったけれど、慣れたら、例えば中学校でも、もっと活用できる仕事があったとか、こういうことも工夫したら教員支援員にお願いできているのではないかと、そうするともう少し満足度が上がってきて、有効活用の策が見えてくるのではないかと思います。学校を変わって教員支援員の負担をかけるより、教員支援員自身もいろいろな学校をかけ持ちでやるより、一つの学校に1年、ないしは2年、しっかりと腰を落ち着けてお手伝いしたほうがやりやすいのではないかなと思います。また、習熟度も分かるのではないかと

いう気もしているんですけど、次年度の教員支援員の配置とか働き方等について考えるうえで、あまりこま切れに変わっていくのもよくないんじゃないかなという気もしております。

市長 そうですね。それは、教育委員会事務局がどう考えているかというよりも、こういう場所でそういうほうがいいんじゃないかという声をまとめていくことによって、具体的な配置とかを決めていけばいいと思っていますので、今の御意見は私も賛成です。基本的にはなるべく今のいい形をここでぶつんと切るのではない形がいいかなと思います。ただ一方で、多分、事務方側の悩みは、中学校で19校、小学校で48校とかあるので、この4校だけがずっと教員支援員のメリットを享受できるという悩みがあるんだと思います。

滝澤委員 そうですね。教員支援員1人が複数校を受け持つと、その学校の満足度が下がってくるような、効果が薄れるような気がします。

市長 だから、3校受け持ったら、3分の1どころか、もう10分の1ぐらいの満足度になってしまうのではないかなということはあると思いますよね。

滝澤委員 はい。なってしまうのではないかなという気もするんです。データのベースが違うので、実験になるのかならないのか、ちょっとよくわからなくなってくると思います。

市長 教育委員会の中で複数校を受け持つという案も議論されたんですか、その辺りはどうですか。はい、中村さん。

中村委員 教育委員会の中で前回、複数校の話が出ましたので、その議論もあったんですけども、私は、単純に思うのが、確かにこのアンケートもそうなんですけど、先生側からのアンケートで、使われる側の、教員支援員側に立った分析というのやはり要るのかなと思います。そういう意味で言うと、複数の学校へ行くより単独校でしっかり動いたほうが、その支援員にとっても私はいいんじゃないかなと、やはり支援員が、それこそ自分の職場に対して満足度が高くなければ効果も落ちてしまうのかなと思うので、そういう観点が必要かなと思います。

市長 教員支援員もずっとお客さんみたいな状態になってしまうと、大変ですもんね。

中村委員　そうですね。

市長　複数校の勤務について、上島先生はいかがですか。

上島委員　何年間かその学校へというのは大事ですけども、はっきり言って、満足度がないところに本当につけておく必要があるのかと、やはり、そういう厳しさを持って学校に配置するべきだと思います。それから、何を支援して欲しいのかをはっきりしなかったら、教員支援員から、「これをする」「あれをする」と積極的にすることになると思います。先生方や学校が「これをしてくれ」ということをやる、例えば、用務員さんなどはどちらかというと自分たちで仕事を探してやるので、教員支援員とは違うと思うんです。先生たちが困っていて、「困っているからして」ということに対して支援する。だから、教員支援員が主体じゃなくてやはり先生方が主体だと。だから、先生方が自分の学校で教員支援員に何をしてほしいのか、そこで満足感を感じてもらわなかったら、満足感が低いところに来年もつけますと言ってもどうかなというところもあります。

市長　そうですね。何をしたいかを千里ヶ丘小学校は本当に、かなり意図的に自分たちが何をしたいかを自ら考える時間を作って、そしてお願いしているという話を、直接、教員側から聞きました。ですから、私が市長コラムに書いた「自分たちの仕事の一部が人に任せられるということになって、初めて自分たちの仕事のことを考えた。」と言っていて、これは千里ヶ丘小学校の実際の教員が言っていた話を市長コラムへ書いたんですけど、本当にそうなんですよね。だから、おっしゃるとおり、教員支援員がせっかく配置になったらどういうふうに任せたらいいんだということを積極的に考えるような職場でないと、こういういい数字はなかなか出てこないでしょうね。富田先生、いかがですか。

富田委員　教員支援員は本当に、この場でも何度か議論になってますけども、やはり、子どもと向き合う時間というのも随分効果があったということですし、それに、働き方を見直す機会にもなったので、それはやはり、一つの学校だけでなく、毎日ではなくてもたくさんの人がそういった効果をまず試験的に味わってもらうことが大事だと思うので、教育委員会の中でも、そのように一人が一校、二校、三校に行ってみるという案が出ていましたけれども、それ自体は、とりあえず試験的にやってみるのは、私としてはいいんじゃないかなと感じました。

市長　そうですか。

富田委員 はい。

市長 そのこの辺りは、いろいろ御意見があるところなんでしょうね。もう一つは、小規模校にも行って見てはどうかという御意見があって、これも「試験的に、基本的に人数の多いところから順番に配置をし始めると、小規模校へしばらくの間は来ないなという感じになっていて、そこは、逆に私は小規模校でやってみてどんな感じになるかというのをやってみたいなという気持ちはあるんですが、その辺りはどうですか。どうぞ、教育長。

教育長 今年はこのような形で、検証させていただいて、確かに小学校、中学校で違いはあるんですが、ただ、全体としては効果はあったのかなと思います。おっしゃるとおり、使い方とか依頼の仕方を一人一人の教員任せにしないということが大事なことだと思います。今までのお話にも出ていますが、学校としてどんなふうに依頼するのか、そういうシステムが課題だなと。その検証についても少しお話させていただくと、限られた人員でこちらもできるだけ多くの学校に効果を味わっていただきたいということを考えるとやはり、一人の方が複数の学校ということも現実的に考えていく必要があります、大規模でも、例えば勤務を3日と2日に分けてどうなるかという複数校への配置をできたら来年度は検証していきたいなと考えています。ですから、さきほど市長がおっしゃられたように、小規模校でも実際にどうなるかということをしてきたら、ぜひ来年は検証したうえで、再来年以降の完成形に向けて考えていきたいと思っています。

市長 今日のところは一応、賛成2、反対4ということなので、そこはきちんと受け止めて来年度の配置について考えてほしいなと思います。事務局がそうしたいというのは分かりますが、複数校の勤務はどうかという意見がこの会議では多かったと。ただ、現場の先生方がどんなふうに考えておられるのかも大事だと思いますので、これからよく、現場の校長先生なのか、むしろ私は、実際にこの教員支援員に仕事をお願いしましょうと呼びかける、現場のリーダー的な先生がいいと思うんですが、その方がどんなふうにお感じになるかをしっかりと聞いてみて欲しいと思います。教員支援員の議論が進んでいますので、そのほかの点も、あと少し時間がありますのでいきたいと思いますが、富田先生、どうぞ。

富田委員 津市立幼稚園の今後のあり方についてなんですけれども、この件もこの場では何度か議論がされていますけれども、このたびの募集の状況を見て

も、随分やはり減ってきたというふうなことで、それはここ数年で本当に劇的であり、確かに危機ではあるんですけども、危機は一つのチャンスでもあるので、これまでのやり方を見直して今後どうしていくかということを議論していくいい機会ではあるかと思うんですよね。ここに示されてあるような、例えば、特別支援という部分であるとか、あるいは、外国につながる幼児への対応というところもそうですけども、どちらかというところ、一人一人を大切に一人一人への理解と支援ということを充実させていく取組であって、保育の幼児教育の内容全体の話ではちょっと違うことにはなるんですね。ですから、幼児教育の内容という意味ではやはり、その下に研究機関園の役割を持った幼稚園という部分が、津市としてどのような幼児教育を大切にしていくという宣言を今後していくのかと関わってくる部分かなと思いますので、そこの部分についてはやはり、現場の先生方ももちろんなんですけれども、津市に長く住まれていろいろな形で考えを持たれている方の意見も聞いていくというのが一つあり得るのかなと思ったりもします。例えばといいますか、県外を見ますといろいろな特色のあることをやられているところもありまして、例えば、先月、鳥取のほうへ行きましたけれども、鳥取は自然環境が非常に豊かなので、自然体験保育を非常に重視して、森の幼稚園ということを熱心にやられているんですね。あるいは、香川県では、瀬戸内の海を生かしているのかよく分かりませんが、芸術に非常に力を入れて、芸術士という形で、芸術、アートを中心的にとり入れた保育というものを現場の先生方と一緒に議論し合って、その中身を検討していくという取組もされていたりとかしますので、そうした他のそういう特徴的な取組もいろいろ研究材料に入れながら考えていくというのは非常に今後大事なことかなと思ったりしています。

市長 研究園についてですね。他の方で御意見ありますか。

上島委員 よろしいですか。

市長 はい。上島委員。

上島委員 私立との関係が旧津市で難しくて、希望しているような預かり保育とか3歳児保育は厳しいところはよく分かります。だけど、津市全体をもうちょっと広げてもらったらどうかと。そうしたら、周辺でいくつかやっているところがあると思うんです。そこを充実させてやることも一つじゃないかなと。結局、センター化していくということは、別にこの中の人じゃなくても周辺へ行っても別にいいんではないかなというところはあります。希望するように持ってい

くより、希望するようにしていったほうがいいのかという気がします。それから、3歳児も確かにすごいと思います。その3年間で育つ子どもというのは。僕も見させてもらって、初めは給食の用意を少しずつやるようになって、もう5歳児になると3歳の子の給食まで用意してやると。小学校へ行ったら、また自分たちが6年生にやってもらう。これもおかしな話なんですけども。それだけ成長するということを、やはり3年間の保育がどれだけ大事かをどこかで提唱すべきだと思うんです。小学校ともうちょっと連携してもらって、そこまでやった子どもたちをどうするかということを感じています。

市長 幼児教育の無償化が3歳から5歳なので、この10月から幼稚園コースの子どもで無償になるんですよね。そうしたら、旧津市の幼稚園へ3歳児が行くところがないじゃないかと言われまして、本当はおかしな話になるんですよね。どうぞ。

滝澤委員 やはり公教育でしかできない教育というものもあるのではないかと思います。気がしていまして、私立保育園は特色を持たせるところがひとつの売りみたいなのがあって、どちらかと言えば、英語を中心に幼児の頃からやるとか、わりと学力が高まるような施策を行ったり、それ以外もあるんですが、公教育ならではの、どうしても子どもに必要な教育をするところで、それができるのが公立の幼稚園ではないかと思うので、本当に質を高めていただくことがまず必要で、公教育ならではの本来の幼児教育とはどうあるべきかを実践していただくような市立幼稚園であっていただきたいと思います。それからやはり、働く者としては、あるいは育児休業なども取れないことはないんですが、やはり保育園に預けるニーズが高く、そして、おうちにいる方でも、3歳児から幼稚園で見てほしい方もたくさんいらっしゃるって、市立幼稚園が3歳児保育をしていないとか、あるいは給食がないというのは、致命的な欠点になってくるのではないかと思います。そういう意味では、やはり、私立幼稚園との差別化というところもあるかと思うんですが、私立、公立でもやはり3歳児保育、給食、預かり保育を柔軟に対応できるように、検討いただけたらいいのではないかと思います。

中村委員 幼稚園で本当に今、課題として大きいのは旧津市の幼稚園への支援のあり方というのが一番、大きいのかと思います。そういう意味で、研究園を検討していただいて、そこでベースのあり方をいろいろ検討していただくことは非常にいいことかなと思うんですが、その際には、やはり滝澤先生からもお話がありましたように、保育ニーズはどうしても大きいので、今、進めていただいているこども園の活用抜きでは考えられないのかと思います。ですから、将来、研究園を立ち上げるにしても、こども園も意識した検討というのは必要ではない

かと思います。

市長 ありがとうございます。私は、この幼稚園の今後のあり方について、というときの議論が非常に狭い、あるいは、いろいろな条件があつてがんじがらめにしばられた議論になっていることが、この問題を難しくしているのではないかなという感じがしています。昔からの市と私立幼稚園との関係であるとか、あるいは昔からの伝統のある園の教育、質の高い幼児教育をやってきたという自負があつて、しかも能力の高い幼稚園教諭たちが目の前にお客さんがいなくなつてあたふたしている図は、決して彼女たちが10人の園の園長になりたいと思つて、30年前に入つたわけではないと思うので、これは非常に働く人にとっても戸惑いを与えてしまつており、この状況は、非常に効率が悪く、経営者として、何か手を打たなければいけないと思います。世の中が変わつてきており、また、幼児教育を無償化するということになってきた中で、果たして、これまでの経緯だけで引っ張られる状態ではだめだと思つていまして、このことを議論するには大きく、やっぱり今の情勢の中で何をすべきかということを考えないといけないと思うんですよね。そのときに、なかなか教育委員会から出てこないと思つて、待っているんだけど出てこないの、今日初めて思い切つて言いますけど、全部、私立に委譲してしまったような他市がどうなったかとか、それから全部こども園に変えた他市がどうなったかとか、逆に、頑なに、市立幼稚園を、公立の幼稚園を守っている自治体がどんなふうになっているかとか、もうちょっと視野を拡げてよその例を見て、我々も客観的な立ち位置を持たないといけないのではないかと考えています。やはり世の中は、私立でできるのであれば私立にやつてもらおうという流れであることは確かでありますし、それから、こども園にしていって、定数が多い状況を2号、3号に譲つていこうという流れであります。その結果どうなっていくかと答えが先に出ている他市とかがいっぱいあると思います。そういう他市を見て「それはやめたほうがいい」とか、「やっぱりそういうふうにしていくべきだ」という客観的な答えがあるような気がします。今までの議論は、ずっぽりはまって、非常に狭い世界で議論しているような気がしておりまして、そこの辺りは宿題としておきたいなと思つていますが、どうですか。

教育長 分かりました。さきほどおしゃつていただいたことを十分に研究して、もう少し幅広い視野で検討していきたいと思つています。

市長 これからそうしましょう。そうしなないとなかなか答えが出ないと思つます。その他はいかがですか。お時間が大体来ましたので、この後の流れなんです

が、今からまさに人事だとか、財政だとかの議論が、ここ１、２か月で進みますので、それをやっていただいたうえで、ある程度、姿、形が見えるところまで進めてもらって、最終的に我々が政策的に考えていたことと違ってないのかどうかというチェックをしていただきたいと思うんですが、どうですか。時期的にはいつ頃ですか。

教育総務課長 例年、１月末か２月になって、市の予算が見えてきた段階です。

市長 その時期に施策をもう１回やりたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

では以上で１番の次年度以降の取組案について終わりますが、２番、その他について何かございますか。よろしいですか。では事務局にお返しします。

事務局 ありがとうございます。これをもちまして本日の事項はすべて終了いたしました。前葉市長から閉会の御挨拶をお願いいたします。

市長 以上をもちまして、第３０回津市総合教育会議を終了します。ありがとうございました。